

パリ以外の相互に繋がりのない城郭を紹介するので、歴史地図を掲載します。

出典：地中海世界地図 東光書店

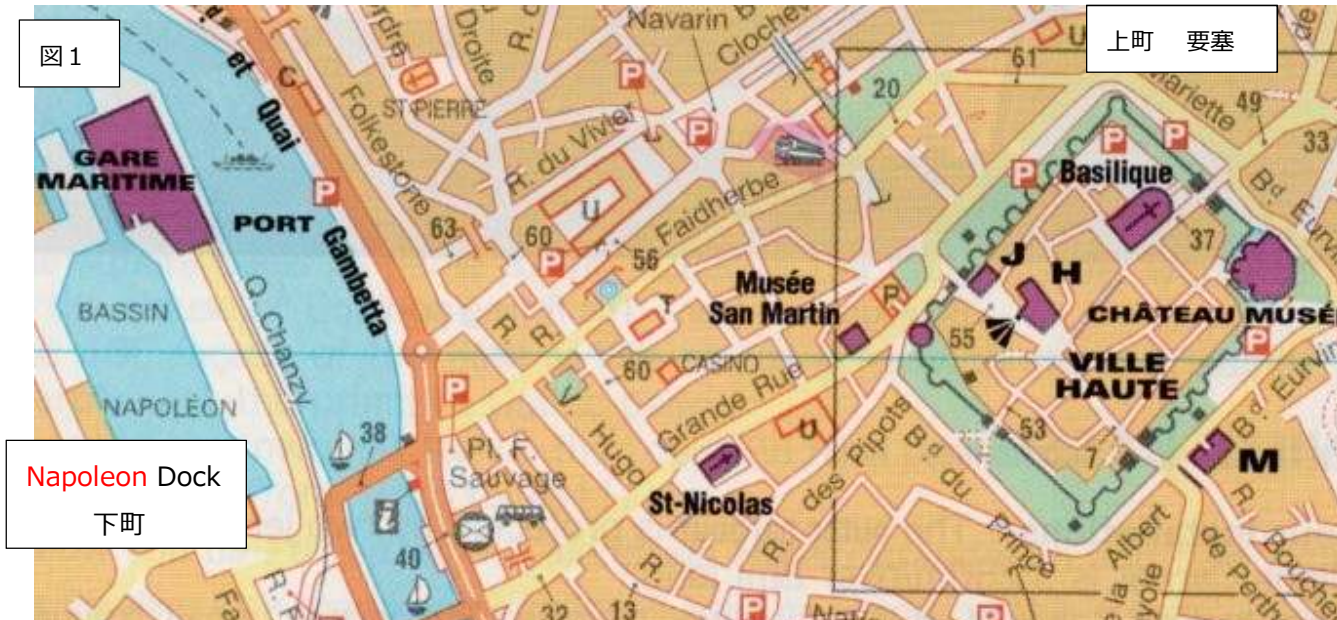


## はじめに

パリには古代ローマ時代から近代まで市壁又は城壁が6回建設されており、それぞれの時代の歴史を眺めながらフランス城郭シリーズとして投稿している。パリだけでなく主要な地方都市の城郭や宮殿も時代背景の中で概説している。

しかし、パリを基軸にしなくても、重要と思いながらも採用しなかった城郭等が沢山あるので、「番外編 その一」として投稿する。

### 1. 城郭都市ブーローニュ Boulogne 古代から中世まで重要な港湾施設を持つ城郭都市



フランス北西部のカレーの隣の要塞都市、約2000年前にローマ軍はここからドーヴァー海峡を渡って、DoverではなくDealに上陸している。ローマ時代はイギリス各地から大陸への玄関だった。ブーローニュの要塞は上の町にあるが堀があるが水源一水路が分からなかった。湧き水だろうか？下の町にはドック形式の港があり、Bassin Napoleonという名の軍港がある。ナポレオンがイギリスを攻撃する為に作ったが、負けてしまい、使われなかった。港湾施設は隣のカレーに負けて、現在はニシンなどの小さな漁港である。城は歴史博物館で、12世紀の古都は世界遺産に登録されている。



### 2. ロワール川の古城巡り パリから古城めぐりのバスツアーが人気

ロワール川はフランス最長の川で歴史的には経済・軍事両面で重要だった。南仏から北上し、ブルゴーニュ地方から徐々に西に向かい、オルレアンからほぼ西に下り、ナントで大西洋にでる。図2はオルレアンから下流の部分である。

川沿いに大小さまざまな城があり、小さな城館を含めると百以上あるが、多くは12~16世紀に競うように建てられた。国内の貴族間の争い、百年戦争、宗教の対立から30年戦争と続き、ルイ14世が主権国家体制を創り、絶対王政を確立するまで不安定だった時期で、国王や貴族が多く住んだ事だった。ル・マンはフランスの城郭シリーズ3で、オルレアンは4で紹介したが、正しくは両市には城は無く、市壁で囲まれた都市である。アンジェ城はシリーズ3で紹介した立派な城で、アンジュー家のシャルル Charles d'Anjou がナポリに作ったカステル・ヌオヴォ城と技術的には似ている。

余談：パリのオルセー美術館の建物は、パリーオルレアン鉄道の駅舎だった。



シュノーソン城：アンリ 2 世が愛人ディアヌに与えたが彼女の死後妻カトリーヌが奪った

シノン城：パリがイギリスに征服されていた百年戦争中に王太子シャルルが隠れていたが、ジャンヌ・ダルクが彼を発見し、鼓舞してオルレアンで勝利



出典：週刊朝日百科 世界百都市

**ブルターニュ大公城（ナント）**  
ロワール川河口のローマ時代以来の産業都市。16 世紀にフランス王領に併合された。アンリ 4 世がナントの勅令を出して、プロテスタントにも信仰の自由を与えたが、後にルイ 14 世がこれを排した。

中に、**奴隷博物館**がある



正面の城門

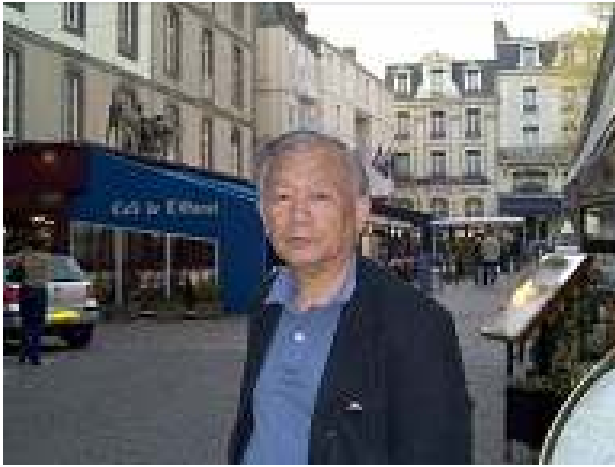


城壁と堀

### 3. サンマロ Saint-Malo モン・サン・ミッシェルの西方約 20 kmの**海上市壁都市** Walled City

紀元前からガリア人が住み、航海術に長けてコロンブス以前にカナダを発見し、交流していた。**一種の海賊**のような商業（？）活動が有名だった。干満の差が大きいので、港はドックになっている。帆船が停泊しているドックは**ヴォーバン・ドック** Vauban Dock と呼ばれているので、ルイ 14 世時代に活躍した武将・戦術家・建築家の**ヴォーバン**が建設に関わったと思うが、文献は今のところ入手できない。 筆者の写真以外の出典：訪問時のパンフレット Discovering SAINT-MALO





4. **モン・サン・ミッシェル Mont-Saint-Michel** 出典：現地ガイドブック、英語版と日本語版 ウエストフランス出版社  
モンとは花崗岩でできた岩盤の事で、高さは 80m ある。聖ミッシェルは塔の上の**大天使**で大修道院の守護天使。

カトリックの巡礼地の一つで「西洋の驚異」と称され、1979 年には「モン＝サン＝ミッシェルとその湾」としてユネスコの世界文化遺産に登録され、1994 年 10 月にはラムサール条約登録地となった。

**聖ミッシェル**（英語ではセント・マイケル）は、天使の中で上位の大天使の一人で、神は軍隊の任に当たさせた。

写真の通り、武器を持っている。

参考：**St Michael's Mount**

モンサンミッシェルから北北西に約 250 km 海を越えて行くとイギリスの最西南端のペンザンスに着く、その近くに、ここによく似た **St Michael's Mount** がある。

（下の写真）。フランス語と英語の違いで同じ意味である。

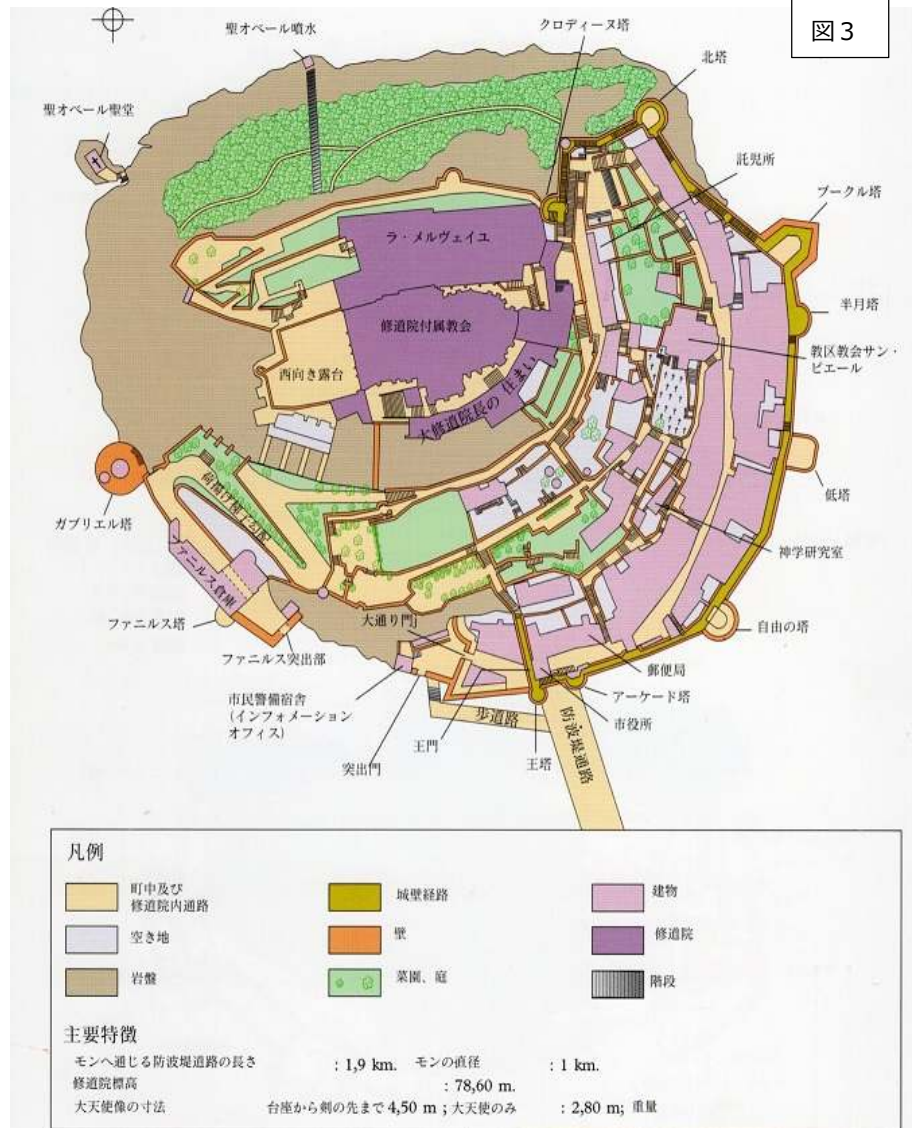
筆者は 40 年前に、イギリス側を先に見たので、フランスがマネしたと、誤解した、愚かだった！何も知らなかったのだ！



➤ 岩盤がそそり立つ湾の潮の干満の差は12mを越え、周辺は平地なので、潮の流れは馬を最も早い速度で走らせるギャロップの時の速度と同じであり危険である。

➤ キリスト教の三位一体は、父なる神、子なるキリスト、聖霊である。(分かりにくい)  
天使はゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教にもあり、神と人間の間を取り持つ使いで、キリスト教では聖霊と天使は同じである。

➤ 百年戦争中のイギリス軍はノルマンディーを征服し、モン・サン・ミッシェルに迫った。  
1424年にイギリス軍の包囲が始まったが、ブルターニュ貴族の遠征隊がサンマロを出發した。彼らは技に長けた船乗りで、勝利した。



5. 中世商業都市プロヴァン Provins (ご注意: 南仏のプロヴァンスの綴りは Provence → 図4の下を参照) パリ東駅から普通電車で1時間、トロワとパリの間に位置し、中世から強力なシャンパーニュ伯爵の領地だった。12世紀から13世紀にかけての中世の街並みが良く保存されており、2001年に世界文化遺産に登録された。毎年開催され散る中世の祭りが有名だが、コロナで中止です。



南西部の市壁、全体の約1/3が中世のまま保存されている



パリとプロヴァンの位置関係 パンフレットより



要塞北西部の Jouy Gate から城内に入った



城内は右の中世の街並

ローマ時代からの首要なローマ街道の交差点にあり、ローマ軍が城壁で囲んで要塞化していた。485年に初代フランク人の王クローヴィスがソワソンの戦いで勝利して獲得。9世紀までにシャルルマーニュ（独、カール大帝）の保護の下でプロヴァン独自の貨幣を発行した。最も大きなイベントは1429年にオルレアンに勝利してランス大聖堂で王太子がシャルル7世として戴冠した後、王はジャンヌ・ダルクを伴ってプロヴァンのサン・キリアス教会でミサに出席した事である。特に有名にしたのは、中世にヨーロッパ中の商人を集めて「シャンパーニュ地方の巡回市場の開催地」だった事である。

図4



図4 出典：プロヴァン観光事務所パンフレット

独り言： 同じ綴りでも Paris はイギリスでは**パリ**でフランスでは**パリ**。フランスでは地名の語尾の s を発音する地域は Reims ランス、Arras アラスなど北部に多い。イギリスが北部に近い事と、複数形の s をきちんと発音することが上品とされている事が理由だろうか？パリから南は Nantes ナント、Orleans オルレアン、Le Mans ル・マンなどです。シャンゼリゼ Champs-Élysées の **s** は単独では発音しないが、**É** とリエゾンして **s-É** ぜになるので無視できない。

## 6. ローマ教皇宮殿アヴィニオン Avignon

図5



ローヌ川の下流から上流を見る。左手はサン・ベネゼ橋、右手（左岸）にローマ教皇が1309年から68年間住んだ新宮殿

図6 レピュブリック門前



図7 パレ広場



図8



## アヴィニオン捕囚時代

1305年、教皇に選出されたボルドー大司教がクレメンス5世としてリオンで即位した。フランス人教皇誕生の背後にはフランス王フィリップ4世の強い影響力があった。アナーニ事件などで教皇を威嚇していたフランス王フィリップ4世の意志を受けたクレメンス5世は（忤度して）ローマに戻らず、枢機卿団と共にアヴィニオンに滞在し、ここに教皇庁の移転を宣言した。これがいわゆる「アヴィニオン捕囚」である。

1309年にクレメンス5世がアヴィニオンに居を定めて以来、1377年にグレゴリウス11世がローマに戻るまで、7代69年間に渡ってこの「捕囚」が続いた。この間、事実上の「キリスト教界の首都」となったアヴィニオンには、教皇庁宮殿、現在はフラ・アンジェリコやボッティチエリの「聖母子」を収蔵するプティ・パレ美術館として利用されている大司教館など当時の建築が数多く残り、その辺りの地区はアヴィニオン歴史地区として世界文化遺産に登録された。

1377年に教皇庁はローマに戻ったが、翌年の78年には教会大分裂（シスマ）が起き、1417年までの約40年間続いた。この間、1408年にかけては反教皇派の拠点となった。1475年には大司教の管理下にはいり、その後は商業の中心地としてさかえた。この間のアヴィニオンは、名目上、教皇の遣外使節によって支配されたが、実際は市民が自治をおこなっていた。フランス革命で教皇はアヴィニオンをうしない、国民投票によって1791年にフランスに併合された。

図9





## 7. カルカソン Carcassonne

### カルカソンヌを見ずして死ぬな

図 10



図 11

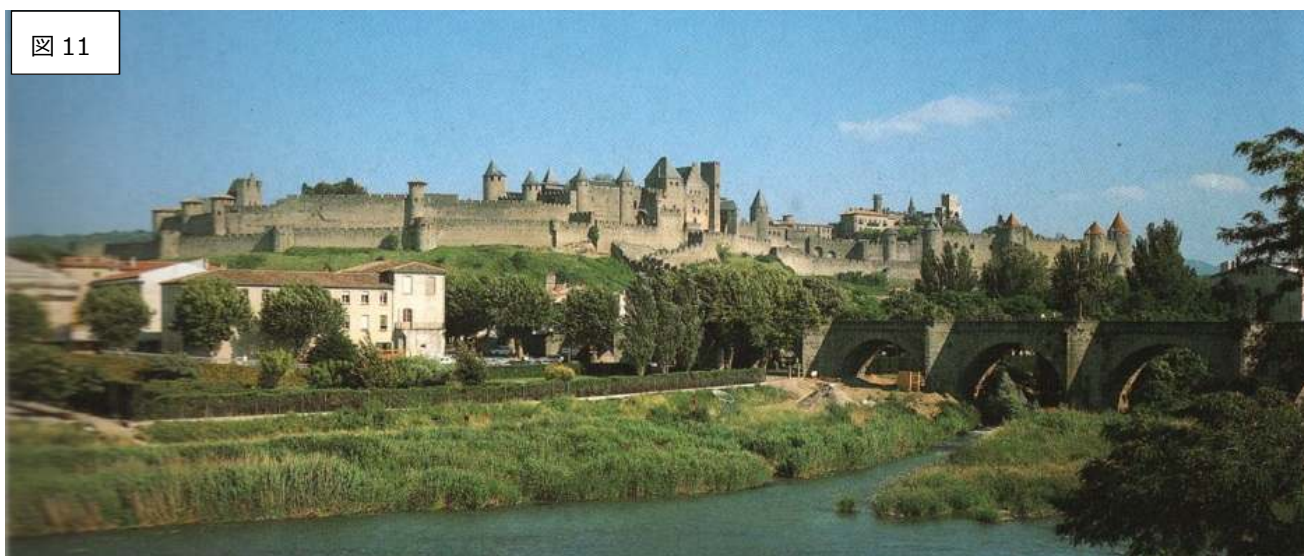


図 10～12 カルカソンヌ写真： 出典 現地ガイドブック " BONECHI カルカソンヌ " イタリア・フィレンツェの Casa Editrice Bonechi 発行のガイドブックを Naomi Yanagawa 氏が翻訳し、「**城塞都市**」と表現している。

図 12



ヨーロッパ最大の**城塞都市**「シテ CITE」を中心とした都市。スペインとの国境とほど近く、宗教的な争いや領土をめぐる争いが生じた時にカルカッソンヌは要塞として利用されてきた。しかし、1659年にスペインとの間で**ピレネー条約**が締結されて要塞の役割はなくなり、次第に廃墟化してゆく。19世紀になって、文化人たちが価値を見出して復元作業をすすめ、現在では1000人余りが住んでいる。古フランス語のCiteは、サイズと無関係に「人が住む集落」の意味で使われていて、パリのシテ島のCiteも同様。語源はラテン語のcivitas（キヴィタス）で英語のcityの語源でもある。イギリスでは規模によってcityとtownに分かれるには14世紀だった。人口とは無関係で大聖堂cathedralのある町がcityだった。例えば、人口5万人のWellsがcityで、70万人のReadingがtownだった。現在はどうかな？



Cite 城内には一般住民も住むが、一般車は入れない。カルカッソンヌ駅でタクシー運転手にホテル名を告げると無線連絡し、ホテル側が小さな車でナルボンヌ門まで向かえる。

### カタリ派とアルビジョワ十字軍

中世ヨーロッパで広がったキリスト教異端のカタリ派、隣町Albiで盛んになり、アルビジョアと呼ぶ。

ローマ教皇の呼びかけで、十字軍が編成されて、カルカッソンヌ城内でも拷問と処刑が行われた。現在も、異端裁判の塔と拷問博物館が残っている。

近代でも異端裁判の塔周辺の地下からは人骨が発見されている。



### 拷問博物館

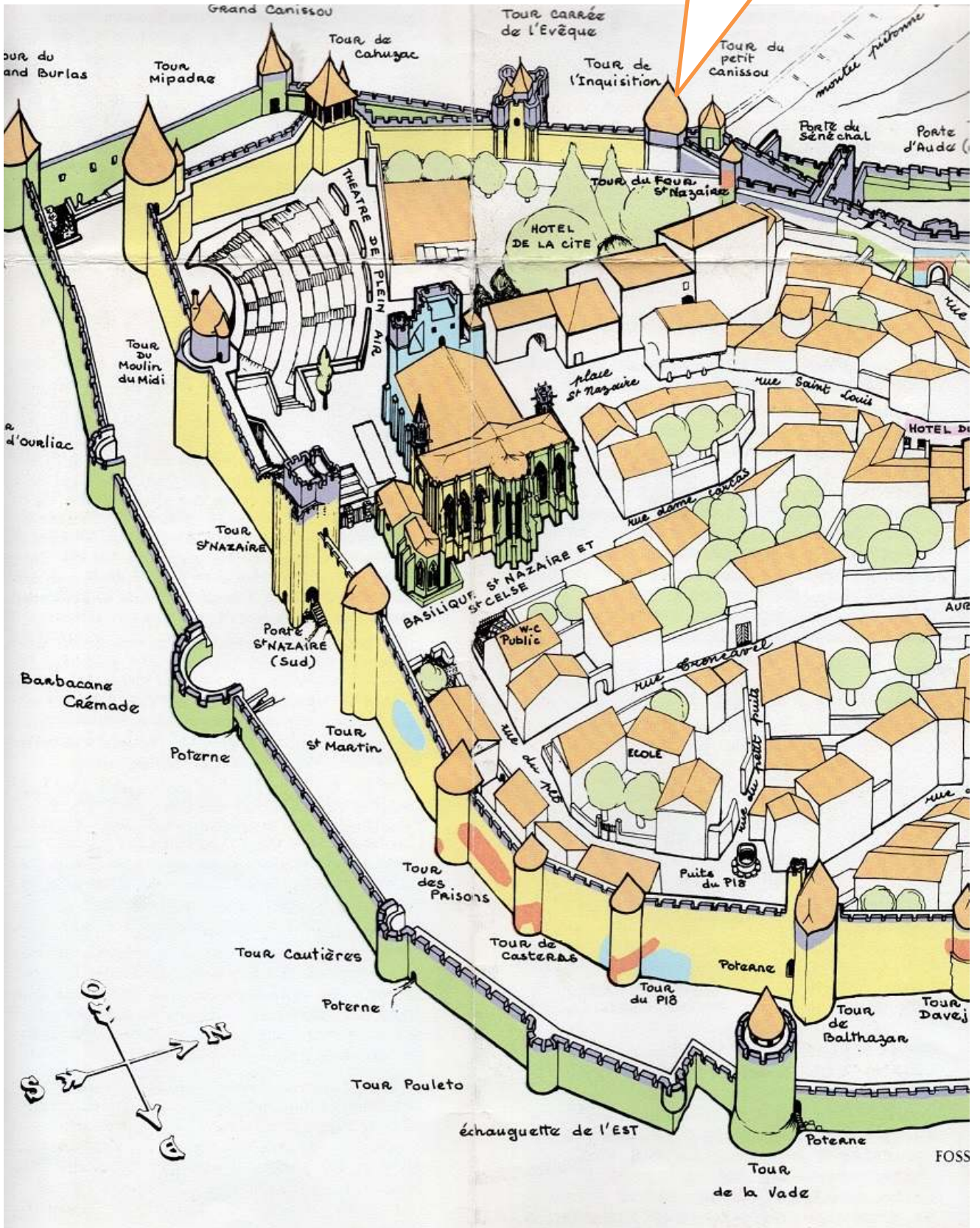
Torture Museum

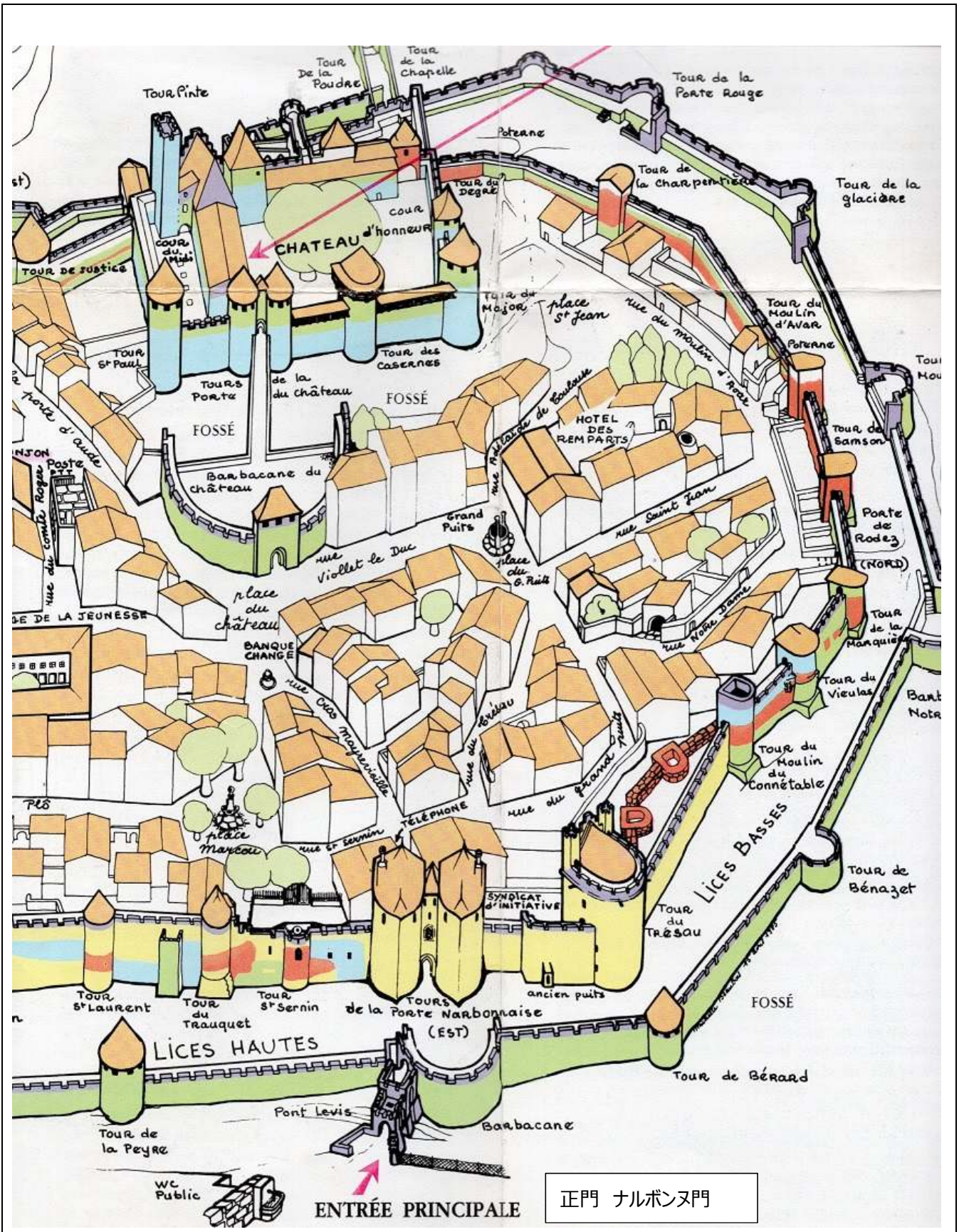


現在でもロンドンを含む各地に拷問博物館がある。

付録地図： 2000年～2010年の間に南仏モンペリエ市の会社に勤務（非常勤）した時に何回か訪問して入手した地図だが、出版元が不明です。“PLAN DE LA CITE” imprimerie 印刷 CASTEL-Carcassonne, Copyright Tous Droits サイズが A1 と A2 の中間であり、地図の主要部のみ二枚に分けてコピーして添付します。

Tour de l'Inquisition 異端裁判の塔





番外一 を終了